



一心不乱に弓を引く磯野さん

埼玉県高校弓道新人戦団体3位

ひと

いそ の ゆう き
磯野 勇輝 さん

一瞬一射に思いを込める

2 引き絞る、28引先にある直径36センチの的を狙う弓道。心技体がそろった射を目指し、いかなる情熱を込めているのは高校2年生の磯野勇輝さん(17歳・塚越6丁目)。川口北高等学校の弓道部員として、仲間と鍛錬に励んでいます。高校入学後、新たに挑戦できることを探していた磯野さん。弓道場の雰囲気や和の装いにひかれ、入部を決めます。最初は射法八節という弓を引く一連の動作に戸惑いますが、同期で真っ先に的中するなど技術を磨いていきました。ところが、上達過程で陥る人が多い、早気といわれる矢を無意識に早く離してしまう

癖が磯野さんを苦しめます。改善に足踏みする状況に焦りを感じますが、自主練習などで心を落ち着かせて基本動作を反復することで、徐々に症状を克服。コロナ禍で部活が休止するなかでも体幹トレーニングを行い、着実に精神力と体力を高めていきました。そして、みごと3人制の代表に選ばれて迎えた10月3日の県新人戦。磯野さんは思わぬ事態に直面します。筋力と弓の張りのバランスが崩れ、矢が下方に集まってしまおうのです。思うように的を捉えられず苦戦しますが、仲間の渡部主将と松浦さんが窮地を救い、県3位に。東日本大会への出場権を獲得します。

「自分が実力を出せれば優勝できていた」。悔しさはあるものの、大会で緊張感を味わいながら仲間と引けた弓には格別の楽しさがありました。現在は弓の張りを強めて、調子も上昇傾向。他県の強豪と相まみえ、1つでも多くのに中てたいと意気込みます。東日本大会は3月に北海道函館市で開催。その勇ましい立ち姿から放たれる矢は、会場の拍手を集め、チームを輝かす栄光に導くでしょう。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 巖にあり

—No.55—



暁斎筆「九尾の狐図屏風」
絹本墨画淡彩 二曲一双屏風

「王」の文字入りの冠を被る中国風の人物と、腕輪を付けた人物が紐で輪を作り、富士山を餌にして、九尾の狐を捕まえようとしています。河鍋楠美術館によると、本図は幕末・維新期の日本の海外事情を描いた風刺画であり、九尾の狐は欧米列強を表し、植民地化された中国とインドが日本を餌に九尾の狐を捕えようとしている場面とのこと。九尾の狐が尾を広げて飛び上がる姿が、迫力ある屏風です。

河鍋暁斎記念美術館 12月23日(水)まで

「《新富座妖怪引幕》完成140年記念 暁斎の妖怪画」展
同時開催「華やかな『暁斎楽画』の世界—複製本より—」展

開館 = 午前10時～午後4時
休館 = 木曜日、毎月26日～末日、年末年始
ところ = 南町4-36-4
入館料 = 一般600円 高校生・大学生500円
小・中学生300円 65歳以上500円
※65歳以上の人は年齢の分かる物、学生は学生証をご提示ください
詳細 = 同館 ☎441-9780



展示会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください



現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)